

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 ポルティジョ マヌエル

BODY-SCAPES: A study on the relationship between bodily elements and the urban scape of Tokyo.

ボディスケープ：東京の都市景観における身体的要素に関する研究

本論文は東京の都市景観における身体的要素に注目し、構築環境における最も重要な要素としての「身体」、身体を持つ有形性や物質性を疎外しないような「身体」と都市環境の関係を論じている。

建築理論の中で、身体は行動分析と人間工学に基づくデザイン技法によって調整されるだけで、身体とその経験は建築の意味の構築と実現に関わることはなく、身体と環境の関係についての十分に理解がなかったという認識が背景にある。

ここでは、身体と建築との関係を、建築との対応や意味の全くない身体そのままの表現としての「身体の外観」と、心の中で形成され意味づけされた身体のイメージとしての「身体イメージ」とに区別した。このイメージは興奮や表現や知覚の三者から生じるもので、解剖学的な状況そのものとは全く異なる身体を理解を発生させる。この目に見える身体と目に見えない身体のイメージとの融合は、人間の生体構造と姿勢を文化的社会的慣習に織り交ぜる。このような知覚の方法 個人的、かつ文化的な想像の表象の複雑な融合体に織り込まれた身体像で構成される は、建築設計において非常に有効な戦略であるとしている。

この論文は7章からなる。

第1章では主題と研究内容、目的、方法論、そして期待される結果を述べている。

第2章では透明感に関する背景と、地理学、心理学、そして建築の分野からの人間と環境に関する理論について概観している。

第3章においては東京の社会 政治的、文化的文脈を述べている。東京の3200万の人々は駅や街路、商店街など至る所で知覚される。近年、東京では多くの場所で建物の外部と内部との力強い結びつきがつくられている。透明でぼやけた浸透性のある商業建築によって身体と建物の境界がまぜこぜにされている場所で、身体と構築環境の関係を見出すことができる。東京では消費文化により顧客の嗜好と興味を引くための闘いが、そのブランド自身を常に変動する東京の都市景観のなかで偶像化させるため、もっとも高度な技術的革新とデザインに向かわせユニークな現象となった。それは大胆な構造的表現と素材によって行われる実験であり、結果は、か弱い見かけの透明な表皮をまとった大胆な無柱空間であり、新たな都市景観を与え、人間の身体、知覚、そして行動の状態に変化を生じさせた。

第4章では東京で「都市のイメージの知覚」について行った調査の結果が分析された。調査は「都市の印象」を5-10分程度の簡単なスケッチする方法で行い、205人

から回答を得た。その結果、建築物 68.0%、道路 40.5%、樹木 33.0%、家屋 23.4%、自動車 22.0%、人 22.0%などの限られた要素がスケッチに繰り返し表れた。このうち動きのある要素（自動車や人）は都市環境を絶えず更新しているものと考えられ、刻一刻変化するため人々の日常的な行動に与える影響は少なく、2 次的な要素となっている。調査結果では、人間があまり認識されていないことが示されているが、都市環境を考える上で人間の存在やその関係性が影響力を持つことも示している。

第 5 章では東京の都市環境において発見された身体が分類され、物理的特性（表皮、骨格、材料）と観念的特性（イメージ、映像、シルエット、陰影など）に分けられる。建築的考察を行う際には、身体と都市環境との相互作用から「直接性」「物語性」「幻想性」「反射性」「開放性」の 5 つの関係が明らかにされた。

第 6 章ではケーススタディーとして、表参道、渋谷、秋葉原における写真とビデオが分析された。店、カフェ、ビューティサロン等がどのような建物（フラッグショップ、デパート、商業ビル、独立のビル、オフィスビル）の何階（1, 2, 3 階）にあるか、そしてそこでの身体要素がフレームに視覚的に占める割合が数量的に求められ分析された。

また、実際にこの種のデザインに携わった 4 名の建築家へのインタビューにより、この種のデザインにおける思考プロセスを調査した。ここで身体を見せるファサードは必ずしも既成の概念ではないことを確認している。

第 7 章においてはフィールド調査と研究の背景において調査された理論とを関係づけ結論をまとめている。

人間の実在性は古来より様々な活用がなされ、常に変化する存在である。建築の分野では、この関係について実体的観点から時間、場所、文化性も含めて考察を試みてきた。今日の技術により環境における身体は新たな展開を見せ、建築は消失するかのようになり、身体を都市風景の主要素にまつり上げた。都市の建築に関して意匠、材料に関する規制は少なく、透明で軽い建築を可能にする東京での体験は独特である。視覚的に開放された状況下において、人間が限界を生み出す要素となり、都市環境に対する知覚の変化をもたらすものとなっている。

本論文は、身体に注目し、身体を、構築環境を構成する要素としてとらえたものである。人間にとっての建築・都市空間がハードな構築物だけで構成されるのではなく、構築物の役割が薄れ、人間の果たす役割が増えつつある状況において、身体そのものも都市景観の一要素ととらえる一つの新しい構築環境の読み取り方を提案したといえる。

以上のように本論文は、人間—環境系として建築をとらえる建築計画学的な空間解釈の一つの方法を提示し、建築計画学の発展に大いなる寄与を行うものである。

よって本論文は博士（工学）の学位論文として合格と認められる。